



写真 84 全景（北西から）



写真 85 溝 1（北から）

溝 1 に重複して小規模な柱穴が 4 個南北方向に連続していた（柱列 2）。他に、土壙、柱穴なども検出されたが、それぞれの所属時期、性格は不明である。

また、本調査区の北南ほぼ中央部において、地山面と造成面の境界を把握することができた。

#### T-5 (第 50・51 図、写真 86 ~ 89)

現状では備中槽跡北側には、御殿と長局・備中槽を画す石垣はない。しかし、火災以前の絵図には、この部分に「L」字状の石垣が描かれている。この石垣の有無を確認するために設定した。

絵図によると、この石垣は土塀を支える基礎石垣で、幅は 4 尺と小規模なものである。高さ自体の記述はないが、石段が 4 段付いていることから 1 段の蹴上げを 1 尺としても、1 m 強というものである。調査の結果、絵図どおり「L」字状に石垣の基礎栗石が検出された。栗石の幅は約 2 m、南北 9.5 m、東西 12 m を測る。石垣に使用されたと考えられる石は皆無であった。南北栗石の東西に柱穴状のビットが幾つか検出されたが性格は不明である。

東西栗石のほぼ中央部において、径 3.5 m 前後の不整円形の掘り肩をもつ造構を検出した（万年 1）。



写真 86 全景（空中写真）



写真 87 全景（南西から）

検出のきっかけは、栗石の大きさの違いであった。即ち、石垣の基礎に用いられているものは、拳大が中心で大きくて人頭大までであるが、本造構内の石は人頭大が主流で中には1人では持ちきれないものも含まれていた。これらの石を少しづつ取上げていったが、何も変わった様子は見られず、ただ石が続くだけであった。地表面から約15m程下がったところで、ようやく径約1mを測る円形の井戸状の石組を確認した（第50図）。確認面から底面までの深さは約35m、地表面からは約5mを測る。底面は地山である。最下段の径は一回り小さく作られている。石積は小口積みで、石の角を下に据える「谷積」と呼ばれる手法が用いられている。また、3～5cm幅の小ぶりな矢穴が多く見られる。

この造構は一見「井戸」のように見えるが、井戸ではなく「万年」である（註1）。



写真88 万年1 (南から)



写真89 万年1 内部 (南から)

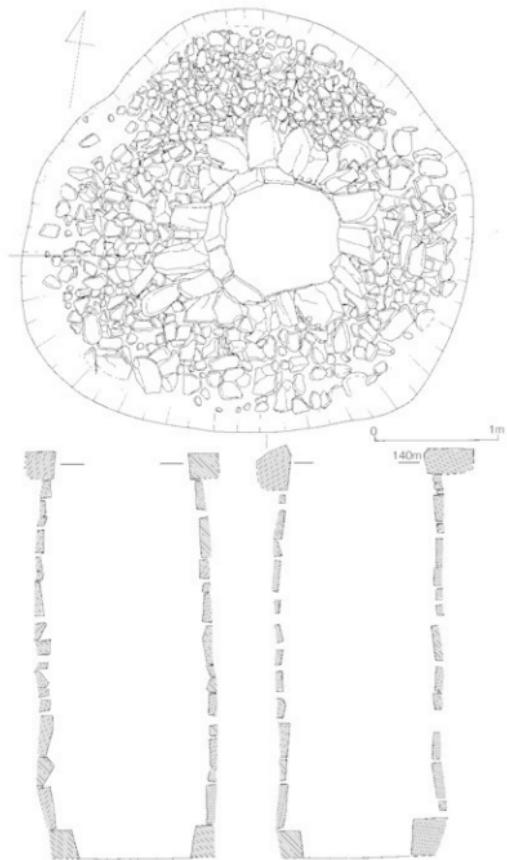


第50図 T-5平面図 (S=1:80)

井戸は水を湛えるもの。万年は水を排するもの、つまり排水施設である。第51図を見ていただければ分かるように、円形の石組と掘り屑との間を栗石で充填し、水を抜きやすくする構造になっている。さらに、付近のボーリング調査では地下約5mまでは底土という結果も得られており、水を溜めるのに不合理な状況にある。

石組内部からは、瓦礫の他に小動物の骨も出土した。瓦の中には「作」が刻印されたものも含まれていた。「作」が刻印された箇所は全て桟瓦の小口部分である。この「作」刻印瓦は、「美作」あるいは「作州」を意味しており、江戸藩邸の火災に伴う再建のために津山から運ばれたことが判明している（註2）。

次に、万年の時期であるが、「L」字状石垣と土塚が撤去されたのが、天保11年（1840）5月とされる（註3）ことから、それ以降ということしかできない。



第51図 万年1平面断面図 ( $S = 1:40$ )

T-6 (写真 90)

復元整備を行う備中橋南東出隅石垣根石の接地状況を探るために設定した。復元にあたってはかなりの荷重が石垣にかかるところから、石垣最下段の根石がしっかりと地山に接しているか否かを確認する必要があった。果たして、しっかりと地山に食込んでいることが確認できた。

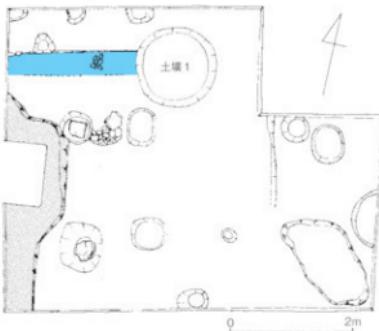


写真 90 全景（南東から）

## 6. 第5次調査（平成13年度）

T-1 (第52図、写真91・92)

火災前本丸御殿の北西角を確認するため設定した。御殿の中の機能で言うと居間相当する部分である。調査では底面に礎石を配した柱穴2、礎石の抜き取り痕跡1、浅い溝1、ピット11、土壤1を検出した。土壤は瓦礫が埋められていたことから、後世のものと考えられる。建物との位置関係は把握できなかった。



第52図 T-1平面図 ( $S = 1:80$ )



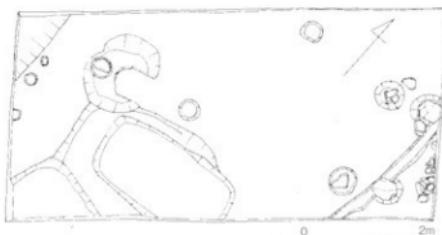
写真91 全景(南から)



写真92 全景(西から)

T-2 (第53図)

火災前の居間から主殿にいたる斜めの渡り廊下跡を確認するために設定した。調査では礎石2、底面に礎石を配した柱穴2、溝1、ピット6、土壤などを検出した。土壤からはガラス、ビン、コンクリート、レンガ等が多量に出土した。溝は幅約20cm、深さ約10cm程度の小規模なものである。北西コーナー部で溝状の落ち込みを確認したが、性格は不明である。建物と造構との位置関係は把握できなかった。



第53図 T-2平面図 ( $S = 1:80$ )



写真 93. 景（北西から）



写真 94 全景（北東から）

T-3 (第 54 図)

火災前の主殿の南側を確認するために設定した。調査区のはば中央で東西に走る2本の溝を検出した。両者の溝は主殿の南側の雨落ち溝になるものと思われる。南側の溝（溝1）は北側の溝（溝2）を埋めて作られていることから、火災後の再建に伴うものと考えられる。調査区のはば中央部に約2m×15mで石が充填された土壌（土壌1）が検出された。この土壌の性格は不明であるが、再建後の雨落ち溝の下層に位置することから、火災前の遺構であることは間違いない。



第 54 図 T-3 平面図 (S = 1 : 80)



写真 95 全景（東から）



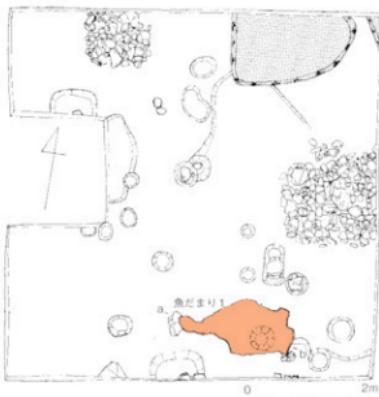
写真 96 全景（西から）

火災前の雨落ち溝は土壤1の中央部で一旦途切れているが、この部分から長局への渡廊下になるものと思われる。土壤1を挟むように東西に検出された礎石をもつ柱穴は、渡廊下に伴うものと考えられる。溝2の北側に平行して2箇所に礎石をもつ柱穴が検出されたが、これは主殿の南側の柱に相当するものと考えられる。

T-4 (第55・56図、写真97~99)

火災前の本丸御殿主殿の南西角を確認するために設定した。調査区の東側と北側で栗石の密集する箇所を検出した。この栗石部分が主殿の南と西の雨落ち溝に相当するものと考えられる。調査区の南側でタタキ仕上げによる造構を検出した。西側は湾曲し、中央部に浅い窪みがある。この窪みは「魚だまり」と呼ばれるものである。

絵図によると「御庭」の記述があることから、このタタキ造構は魚を釣っていた池であると思われる。この場所は火災による再建後には建物が建なることから、火災前の造構ということになる。他に礎石をもつ柱穴が3箇所確認されたが、これらはいずれも火災後の建物に伴うものである。



第55図 T-4平面図 ( $S = 1:80$ )



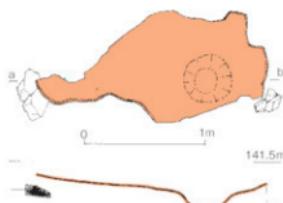
写真97 全景（南東から）



写真98 全景（東から）



写真99 魚だまり1（南から）



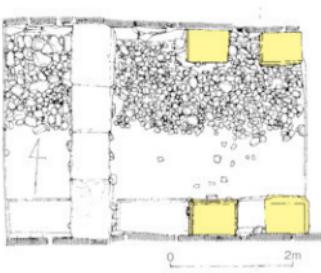
第56図 魚だまり1平面・断面図 ( $S = 1:40$ )

T-5 (第 57 図、写真 100)

埋没石垣を追求するために設定した。先年の調査で、埋没石垣は五番門南石垣の石段北側から北方向に延びることが確認されていた。これを確認するのは六番門の位置しかないことからトレンチを設定した。六番門の礎石は 4 石とも露出していた。調査の結果、この場所にまでは伸びていないことが判明した。恐らく、六番門南側石垣の中で終わっているものと思われる。天守台南石垣に沿って多量の栗石が検出された。これは天守台石垣の排水のためのものと考えられる。



写真 100 全景 (北から)



第 57 図 T-5 平面図 ( $S=1:80$ )

T-6 (第 58 図、写真 101 ~ 106)

五番門跡の遺存状況を確認するために設定した。調査区中央部で豊島石製の南北方向の排水溝（溝 1）を検出した。さらに、この溝に直行して東方向にも同様の溝（溝 2）が延びていた。溝 1 の東側の両石垣沿いに方形柱を支えた礎石をもつ柱穴（柱 1・2）が位置する。この柱 1・2 が門の主柱になるものと考えられる。溝 1 の西側にも南北両石垣に接して小規模な礎石をもつ柱穴（柱 3・4）が認められた。これは控え用の柱跡になるものと思われる。また、主柱の東側にも石垣に接して 3 時期の柱穴が切り合っていた。

絵図によると東側から五番門に入る際には、4段の石段をあがる構造になっている。このことから、五番門跡の豊島石製の排水溝は暗渠であったということになる。しかし、この場所での暗渠排水の必要性は認められない。在城時どのように機能していたのか興味ある問題である。



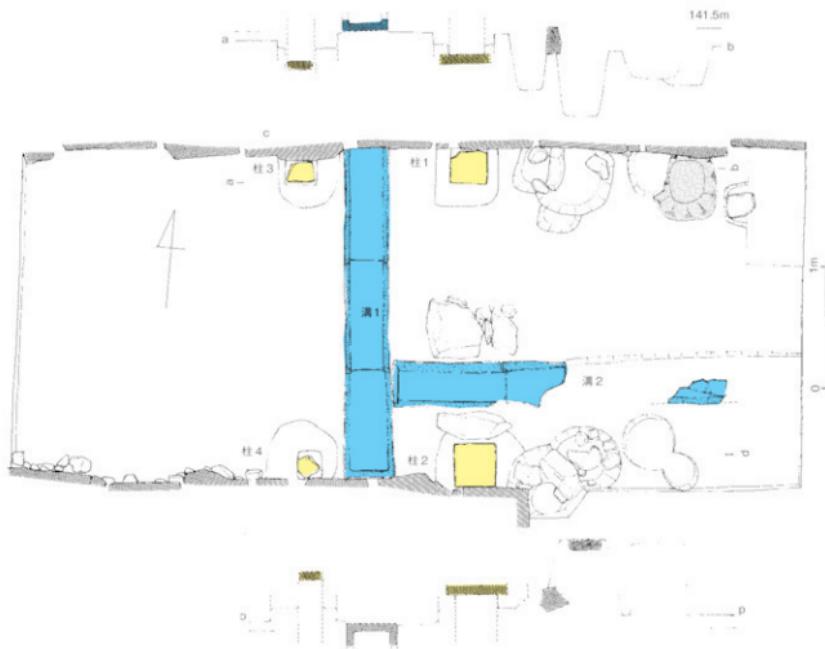
写真 101 全景 (南から)



写真 102 全景 (北から)



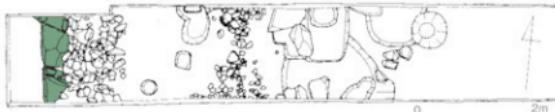
写真 103 柱穴 1 (南から) 写真 104 柱穴 2 (北から) 写真 105 柱穴 3 (南から) 写真 106 柱穴 4 (北から)



第 58 図 T-6 平面・断面図 ( $S = 1:40$ )

T-7 (第 59 図、写真 107)

備中櫓北側の塀を確認するために設定した。火災以前の絵図によると、五番門南石垣の東南角から東方向に塀が伸びている。今後の整備の資料とするために実施したが、塀を特定できるような明確な遺構は検出できなかった。



第 59 図 T-7 平面図 ( $S = 1:80$ )

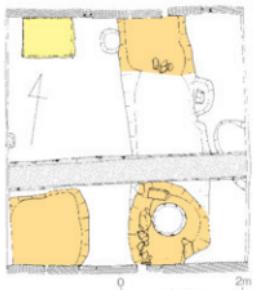


写真 107 全景 (東から)

## 7. 第6次調査（平成14年度）

T-1 (第60図、写真108・109)

八番門跡の遺存状況を確認するために設定した。八番門は礎石4石の門であるが、残っていたのは1石だけで、他の3石は抜き取られていた。残っていた礎石のレベルから当時の地表面は、現地表面よりも約10cm程度下がっていたことが確認された。



第60図 T-1平面図 ( $S = 1:80$ )



写真108 全景 (北から)



写真109 全景 (北から)

T-2 (第61図、写真110～115)

七番門跡の遺存状況を確認するために設定した。天守台北側から石段を降り、西に直角に折れた所が七番門である。まず石段であるが、絵図によると数段あったことが認められるが、調査の結果、最下段が一段残っていただけで他は全て失われていた。石段及び石段を降りた北側の枠形部分東側の石垣を追究するために、調査区を東側に拡張して調査したが、北半分で最下段の一段が遺存しているだけであった。枠形部分には、排水溝やゴミ穴などで失われた箇所もあるが、青灰色の円碟が一面に敷かれていた。

七番門の礎石は西側の2石が遺存していた。他に小規模な礎石1と浅い礎石抜き取り痕跡が3箇所検出された。これらはいずれも等間隔で左右



写真110 発掘調査風景



第 61 図 T-2 平面・断面図 ( $S = 1:80$ )



写真 111 全景 (東から)



写真 112 溝 1 (南から)



写真 113 溝 1 (北から)



写真 114 溝 1 (東から)

対称に位置している。

T-3で東方向に延びている豊島石製の排水溝は本調査区で北に直角に折れ、石段の下を通りさらに西に折れて七番門の中心を抜け西側の石垣に取り付くことが判明した（溝1）。当然、蓋石が示すように暗渠排水である。この排水の蓋石は、これまでの豊島石製のものではなく、凝灰岩製であることに特徴がある。西端の石垣に取り付く部分は、排水溝が納まるように石垣築石がU字状に掘り込まれている。七番門付近は豊島石製排水溝が抜き取られているが、本来はつながっていたものである。

この排水溝（溝1）に先行する時期の排水溝も検出された。それは東側の石垣から出て、石段に平行に走るものである（溝2）。多くの鉄釘が出土したことから木樁であったことが分かる。

#### T-3（第62図、写真116～119）

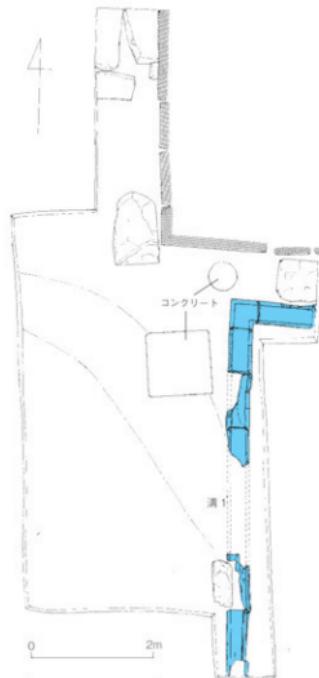
多間槽の北西角内側を確認するために設定したT-4同様、槽自体に関係する造構は確認できなかったが、雨落ち溝あるいは暗渠排水と考えられる豊島石製排水溝（溝1）のコーナー部分を検出した。槽の東側に平行する南北方向の排水溝の位置は、T-4で認められた抜き取り痕跡と一致する。従って、この部分も東方向への軒の出はT-4と同様である。

北西角から東へ直角に折れる北側の槽の幅は「二間」で、南側及び西側の槽に比べて一間狭い。これに呼応して、排水溝も槽に近い位置で検出された。この位置関係から南方への軒の長さは約1mという数値が得られる。西側の石垣天端面と排水溝底面のレベル差は、排水溝の方が約50cm程低い。このことから、この一帯の排水は暗渠になる可能性が考えられる。排水溝と石垣の間は全て栗石で埋められている。

本調査区では旧石垣を検出することができなかった。これは旧石垣が本調査区まで達していないか、あるいは達していたとしても栗石の中に埋没しているかどちらかである。しかし、今回の調査はその確認をするのが目的ではないため、追究はしていない。



写真115 溝1 (西から)



第62図 T-3平面図 (S=1:80)